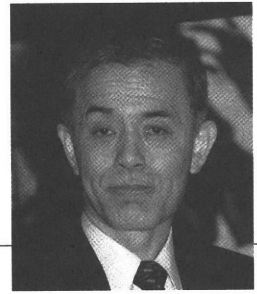


医学生に必要なもうひとつの教育



福岡大学2外科 教授 白^{しらくさ}日^{たかゆき}高^{たかゆき}歩

医師国家試験がかつてのように楽に通る時代ではなくなり、今日のように難しくなってくると、医学部に入ることの目的すべてが6年後の国試合格をめざすといった味気ないものにおきかえられてしまう感がある。地方私立大学として我々がめざす医学教育の大目標は優秀な臨床医を育てることにあり、日夜、そのことに悪戦苦闘しているのが現状である。医師国試の合格率をアップさせるためにはどうすればよいかは我々にとって大変重要な問題であるが、よき臨床医を育てるためにはどのような教育法を取り入れるべきかという命題にも毎日頭を悩ませている。教育内容の統合整理、クリニカル・クラークシップの導入等々、我々が抱える課題は多く、まさに「医学教育は永遠の悩みである」との感を新たにす。

医学生に教えるべき知識、情報量が猛烈な勢いで増してきている今日、国試合格率が年々厳しくなる事情も重なって、かつて我々が与えられた教養課程2年間のような余裕のある時代はもう望まれなくなった。6年間という長い時間でもこなしかねないほどの医学知識が毎日提供される時代でもある。私達の大学のように最終学年を国試に備えて準備させるためには、医学部入学の1、2年の時から基礎医学の一部を学ばせることが時間的にも大変必要となってくる。特に生物学などに無知な学生にある程度の基礎知識を与えるためにも、この2年間を無駄に過ごさせるわけにはいかない。

このような医学教育事情の変遷に伴って、そのあおりを喰らう形がかつて選択されていた文系の

教養科目は医学教育の中身から追い出されつつある。人間形成に必要な時間的余裕を与えられぬまま医学生は国試、国試へとさらに駆り立てられているのが実状である。その結果としてこれからどのような医師が作り上げられてゆくか、10数年後の彼等の姿を興味深く想像する。

本来、医学生として医師になる前に自分の生き方を真剣に自問自答する時間的余裕があつて当然のことと思う。戦前の旧制高校時代を体験された先輩医師のお話を聞くと、その制度下での学生生活を送ることによって何物にも替えがたいほどのよき青春時代、よき友人関係、よき人間形成が与えられたとのことである。生きることの意味、学問することの意味などを真剣に悩み、考える時間的余裕があつたのであろう。戦後になっても、筆者の医学部在籍中にはそのような時間的余裕が確かに存在したように思う。怠けることも出来たが、自分で悩み、考え、本を読む時間が十分に存在した。ただ、教養課程の授業の内容は面白くなく、くだらなく、教養にもなんにもならなかった気がする。たくさんの学生を集めての講義だから無味乾燥になるのも当然であつたろう。時代が変わっても今日でも事情はおそらく変わらぬのではなからうか。教官が医学生の為に真に必要と思われる教養を、彼等の将来を思って体系だてて教える努力をするのでなければ、ひとりよがりの他人の教育で終わるだけのことである。そんな教養教育なら全然なくてもかまわない。時間があったいなくなっているからである。漫然としたままの

教育をしてきた結果、6年間の医学教育カリキュラムから従来のような教養科目が追い出されてゆくこともやむをえぬという感がする。

しかし18歳の時点から医師への専門教育にのみひたすら時間を費やされることの結果はどのようなものとなるのだろう。以前、長年日本に在住し私の妻と親交のあったある米国人女性が病気で悩んでいたときの話である。妻が日本の大学病院も米国に変わらず優れていると説明して受診を勧めても、その女性は嫌がったそうである。理由は、おそらく初診でいろいろと問診あるいは診察するであろう青、壮年日本人医師への信頼感の欠如にあったようである。その米国人女性は医学知識や技術のレベルを比較したのではなく、人間的に未熟な医師に診てもらふことをいやがったと思われる。

米国と日本の医学教育のシステムは異なっており、ことさら、我が国の医学教育課程にばかり欠陥があるとは言いきれない。それにしても今の我が国の現状で医師としての人格形成はどのように考えればよいのであろうか。一般社会人の医学部への編入学制は、目的意識をしっかり持った成人を医学生として受け入れるひとつの具体策といえる。ただ、経済的により豊かな職への転向が目的となるのであれば馬鹿げて情けないことである。

さて人格形成のための教育はどのようになされるべきであろうか。結論として、医学生は現今の6年間の学生生活の中において、自分自身で己の人格形成に努力しなければならないと思う。かつての我々の時代に比しはるかにハードで余裕のない6年間である。しかし、臨床医学の基本が患者と医師とのよき人間関係にあるのであれば、自助努力をして幅広い教養、人間性を身につける他ないであろう。以前、産業医科大学の外科教授の職にあった頃、1人の女子学生が卒業時の挨拶に私の部屋を訪れた。その際、最近興味をもって読んでいる本があるとのことなので、どういう内容の本ですかと尋ねたところ、ウィリアム・オスラー

の「医学する心（日野原先生邦訳）」とのことであった。私はオスラーの名前は医学用語に関連して知っていたが彼の著書までは目にすることがなかった。そしてその内容を知るにおよび、いまさらに欧米、ことに米国の医学教育の奥深さに心打たれ、かつ、このような本を読もうとする女子学生の真摯な姿に感動したのであった。オスラーが常に学生に人格を高めることの大切さを説き、数々の古典から得られる啓蒙的な教訓を学生達に教え聞かせていた事実を知ると、医学教育とはただ単に知識の伝達にとどまらず、人間として、また医師としての品性陶冶をうながすことに尽きると納得したしだいである。

